慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「白石建議」概観
Sub Title	Arai Hakuseki's economics
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2015
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.108, No.1 (2015. 4) ,p.235- 246
JaLC DOI	10.14991/001.20150401-0235
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20150401-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」108 巻 1 号（2015 年 4 月）

研究ノート

「白石建議」概観

寺出道雄*

(1)　はじめに

本稿の目的は，筆者がこれまでにおこなってきた，「白石建議」の内の経済論である「四」～「八」に関する考察――その内訳は，文末の参考文献表にある――に対して，一応の纏めをおこなうことである。纏めである以上，本稿は，手短を旨とする。

新井白石（1657（明暦 3）–1725（享保 10）年）の経済に関する議論の最大の特質は，それが経済政策の実質的な策定者による議論であることにある。そして，彼は，その経済政策――貨幣政策――の策定という極めて実践的な課題に，絶えず，経済理論を参照しながら対応した。こうした，理論から政策までという幅広い議論を可能にしたのは，彼が，単なる「経済官僚」であったのではなく，幕政の中枢にあったことである。よく語られる「正徳の治」とは，白石を「頭脳」とした統治であった。

以下では，そうした，「建議」の「四」～「八」について，3 項目にわたって見ていく。

(2) の「「白石建議」の概観」では，「建議」について一瞥するとともに，その特質と歴史的な位置づけにふれる。

(3) の「「白石建議」の経済学」では，「建議」における経済理論がどのようなものであったのかについて見ていく。すなわち，そこでは，貨幣の数量や品位が，物価にどのような影響を与えるのかに関する白石の議論を，図や式も用いて説明し直すのである。また，そこでは，白石の経済理論の系譜について一瞥する。

(4) の「関連事項表」においては，白石の生涯における「建議」の位置を見る。なぜ，一介の儒学徒が幕府の貨幣政策を策定するようになったのかを，簡潔に知るのである。

＊　慶應義塾大学経済学部

(2)「白石建議」の概観

1. 白石は，1709（宝永 6）年から 1716（享保元）年までの間，徳川 6 代将軍家宣，7 代将軍家継の政権下で，寄合儒員として幕政の中枢にあった。彼が，数えで 53 歳から 60 歳までのときである。

白石が，幕政において直面した諸種の問題のなかで，主な経済問題は，金・銀貨の改貨問題と金銀の海外への流出制限の問題であった。その 2 つとも貨幣問題である。そのことは，市場経済（商品・貨幣経済）の発展が，「折り返し不能点」を越えてしまった，「ポスト元禄」の政治家にして思想家であった彼にふさわしいことであった，と言えるであろう。白石の経済論は，『折たく柴の記』にも散見される。しかし，それが首尾の通った論考として展開されているのは，「白石建議」の「四」～「八」においてである。そのうち，「白石建議」の「四」・「五」・「八」，すなわち「改貨議」は，1713（正徳 3）年の作品である。この点は，白石自身が，その末尾に記している。また，「白石建議」の「七」，すなわち「改貨後議」は，1714（正徳 4）年の作品である。この点は，『折たく柴の記』によって確認出来る。ちなみに，正徳の改鋳は，1714（正徳 4）年である。

これに対して，「白石建議」の「六」に収められた，相関連した 3 つの掌篇の成立年は，はっきりしない。しかし，その 3 篇目「本朝金銀銅外国へ入りし惣数の事」において用いられている統計の最新データは，1708（宝永 5）年のものである。白石は，1709（宝永 6）年における家宣の 6 代将軍への就任後には，幕府による統計を自由に用い得る立場にいた。そうすれば，1708（宝永 5）年までのデータが最新のものであった，家宣の就任後あまり間もないときを，「六」の著述時点であるとすることが出来る。そのように推測すれば，その執筆は，「改貨議」や「改貨後議」の前であることになる。すなわち，「建議」は，「六」→「四」・「五」・「八」→「七」の順に書かれたことになる。（「補遺 I」参照）

その概要は，

「建議　四」では，まず，貨幣数量説による貨幣論・物価論と，それにもとづく現状認識が展開される。この部分は，「改貨議」全体の基本的認識の提起に当たる。それにつづいて，改貨に関する諸説が批判される。その諸説は，白石にとって受け入れがたいものから，白石の改貨策に近いものへという順に紹介・検討され，白石の改貨策への導入となっている。

「建議　五」では，まず，改貨にあたって幕府が取るべき姿勢が述べられる。その後，白石による改貨の具体策の内容が展開されている。それは，金鈔・銀鈔という一種の紙幣の発行を媒介として，金・銀貨の改貨をおこなうという，今日の眼から見ても意表をつくと言える策である。

そうした具体的な政策を，一連の算術的な手順の表として纏めたのが「建議　八」である。そこでは，周到な計算によって，金鈔・銀鈔の発行を媒介とする改貨が実現可能なものであることが示される。

前記のように，以上，「四」「五」「八」3 篇が，「改貨議」をなす。この「改貨議」は，単

に長さにおいてのみでなく，その内容の緊密さといい，リズミカルな速度を保ちながらも硬質な論理性を崩さない文体といい，白石の渾身の力作である。

「建議　六」では，日本の金・銀・銅についての歴史が，それらの産出，貨幣制度，海外への流出という 3 つの視点から展開されている。いずれも掌篇である。そのなかでは，金銀の海外流出の歴史を扱い，その流出制限を論じた第 3 篇が，白石の統計利用の巧みさを示すものとして，際立って興味深い。

「建議　七」では，正徳の改鋳に対する批判への反批判が展開される。正徳の改鋳では，金・銀貨の品位と重量に関しては白石の改貨策が生かされたが，金鈔・銀鈔の発行は，おこなわれなかった。そうしたもとで，白石にとって受け入れがたい改鋳批判に対する反批判がおこなわれている。そこでは貨幣の品位の変化の問題が扱われていることが注目される。

これも前記のように，「七」が，「改貨後議」である。「改貨後議」の白石には，正徳の改鋳が開始されたことからする，精神的な余裕が感じ取れる。

2. 白石は，彼が直面した経済を，主に植物由来の再生可能・非枯渇的な財の流通を，金銀という再生不能・枯渇的な資源から造られた貨幣が規律するシステムとして捉える。そうしたシステムのもとでは，貨幣の品位と数量をコントロールし，その海外への流出を制限することは，公権力の重要な任務となるのである。

したがって，「建議」は，「鎖国」という制度的枠組みのなかでの経済の骨格のあるべき姿を論じ抜いた著作である，と言える。「建議」を読むことは，地理的拡大を遂げていく西ヨーロッパ諸国における重商主義の意味を裏から照らし出すことにも繋がるであろう。ここで，「重商主義」を持ち出すことは，単純に同時代性によるのではない。白石は，「鎖国」のなかで可能な限り世界を見渡し，スペイン継承戦争の帰趨をはじめ，重商主義諸国の情勢にも強く注目した人だったのである。

白石は，述べる。

「按ずるに，ゼルマアニヤ・フランスヤの戦始りし事は，本朝元禄十三年庚辰に当れり。兵連なること十四年にして，事たいらぐ。此年，本朝正徳三年癸巳也。」（『西洋紀聞』（1968）p.63.）

日本における重商主義の経済論と言えば，「交易を用て，他国の金銀銅を絞取，我国へ取込て国力を厚く」（本多利明（1970）p.166.）するという議論が想起される。しかし，18 世紀初頭の日本が直面した課題は，重商主義諸国が，日本の「金銀銅を絞取」，外国へ「取込て国力を厚く」することへの，「鎖国」という名の防壁を維持することであった。世界的な視野においては，白石の議論は，重商主義のインパクトへの応答として，重商主義時代の経済学であった。

3. こうした「建議」における経済論は，当然，経済政策論に収斂している。しかし，その叙述は，先にふれたように，経済理論・経済史の領域にも及んでいる。白石の経済政策論の内容的な特質は，認識論的・方法論的な基礎が確実な，経済理論の応用，算術の利用，統計の利用，そして歴史研究の応用に，明確

に基礎づけられていることである。

この広範な学識・関心に支えられた白石の議論の実践的な性格は，前近代の日本の経済論の歴史のなかで特異なものである，と言える。その実践的性格が，極めて明晰な論理性を備えて表出されていることも強調されるべきである。彼の経済政策論は，経済理論から演繹された骨子を，統計（数値）を用いて肉付けすることによって，あるいは，逆に，現実から得られた統計（数値）に依拠して，将来を予測することを可能とする歴史的な傾向性を捉えることによって，構成されているのである。そうした，実践性・論理性を兼ね備えた白石の経済論は，単なる経済「論」を越えて，経済「学」となり得ている，と言える。

白石の経済「論」が経済「学」たり得た究極の理由は，彼が，そうした実践性・論理性をもって貨幣市場のメカニズムそのものを分析したことにある。彼は身分制を肯定した。しかし，彼は，独自のメカニズムを持った貨幣市場が，そうした身分制に組み込まれており，その支え無しには身分制は維持できないと認識したのである。そこには，「公卿的礼治主義」（丸山眞男（1983）p.123.）なるものの片鱗すらない。

——上申文である「建議」は，すべて高度に政治的な文書である。そうした文書のなかで，「学」たり得る主張をなした白石の議論は，今一度読み直すに十分に値する。

確かに，白石の用いた経済理論という「道具箱」の中身は，未だ乏しいものであった。しかし，注目すべきは，経済理論の乏しさではなく，そうした「道具」のみによって，しかも決して「専門領域」ではない経済学において，整然とした議論の体系を組み立て得た，白石の知的な力量であるように思われる。

（3） 「白石建議」の経済学

1. 白石が直面した最大の経済問題は，金・銀貨の改貨の問題であった。それは，当時の激しいインフレーションに対処するための政策であった。白石は，インフレーションを貨幣数量説的に捉えた。また，それへの対策も基本的には貨幣数量説に基礎づけられたものであった。

そこで，その点を見るために，まず，「建議四」から以下を引用しておこう。白石の基本的命題に下線を引いておく。

「異朝歴代の間，論じ候事共を併（あわ）せ考候に，古の善く国を治め候人は，物の貴賤と貨の軽重を観候事候て，其政を施し行はれ候き。凡（およ）そ物の価重く候事は，貨の価軽きにより候て，貨の価軽くなり候事は其数多きが故に候へば，法を以て其貨を収めて其数を減じ，又，物の価軽く候事は，貨の価重きにより候て，貨の価重くなり候事は其数少きが故に候へば，法を以て其貨を出して其数を増し，貨と物とに軽重なきがごとくに其価を平かにし候時は，天下の財用ゆたかに通じ行はれ候由相見え候。……もし此説に拠り候はゞ，当時万物の価の重くなり候事，金銀の数多く候て，其価軽くなり候故により候事，疑ふべからざる事にて候。」（『全集』版，pp.191–192.）

下線を引いた叙述について考えていこう。

それは，① 貨幣数量の増加・減少は，物価

水準（「物の価」）を上昇・低下させる。② 貨幣数量の増加・減少は，貨幣の購買力（「貨の価」）を低下・上昇させる。という，相互に同一事態の別の表現である 2 つの命題に言い換えられる。こうした貨幣数量説は，貨幣の財の流通手段としての機能を問題にした議論である。

その 2 つの命題は，

$$M = PT \qquad (1)$$

ここで，M：貨幣数量。P：物価水準。

T：財の取引総量。

という交換方程式をもとにして理解し得る。その点を，図によって視覚化しておけば，(1) 式を図示した図 1 から，図 2・図 3 を導き得るということである。

図 1 のように，財の取引総量 T を一定とすると，貨幣数量 M の増加・減少に応じて，物価水準 P(= M/T) は上昇・低下する。そのことを描き直したのが，図 2（命題①を示す。）である。また，図 2 からすれば，貨幣数量 M の増加・減少は，物価水準の逆数 T/M である個々の貨幣片による財の購買力を，図 3（命題②を示す。）のように，低下・上昇させることになる。

以上のように，命題①・②を知っていれば，貨幣数量説の含意を捉え得たことになる。なお，貨幣数量説は，それが成立する過程で生まれるさまざまな事態を捨象した，長期に関する議論である。

2. さて，ここで，白石が直面したより具体的な問題である，金・銀貨が併存するもとでの増鋳の効果について，事態を簡単に解釈しておこう。

金貨をニュメレールとして，金貨で計った銀貨の価格を s とする。そうすると，金貨で表示した流通手段の総量 M は，金貨の量 M_g と，銀貨の量 M_s にその価格 s を乗じた値 sM_s の和で示される。(2) 式である。

そうした流通手段の総量 M が，財の取引総量 T を一定としたもとで，金貨で計った物価 P の決定に関与することになる。(3) 式である。

金貨の量 M_g を一定として，銀貨の量 M_s が増大した場合，銀貨の価格 s は低下し，逆のときには逆になる。(4) 式である。

幕府の貨幣政策によって，M_g，M_s が決定されると，(2) 式〜 (4) 式の小システムは完結する。

$$M = M_g + sM_s \qquad (2)$$

$$M = P\bar{T} \qquad (3)$$

$$s = s(M_s) : s > 0, s' < 0 \qquad (4)$$

ここで，銀貨の増鋳がおこなわれた場合を考えよう。(4) 式から銀貨の価格 s は低下し，「金高銀安」が生まれる。銀貨の増鋳がおこなわれると，その価格 s の低下によって，銀貨の「はたらき」（『全集』版，p.194.）は小さくなるのである。

まず，簡単に，増鋳によっても，金貨で表示した銀貨の総体の購買力 sM_s は不変となるとする。その場合は，(2) 式，(3) 式から，金貨で計った物価 P は不変であるが，銀貨で計った物価 P/s は上昇することになる。

銀貨に対する需要の状況によって，増鋳による銀貨の価格 s の低下率が小さく，sM_s の値

図１　貨幣数量（M）と財の総取引量（T）と物価水準（P=M/T）

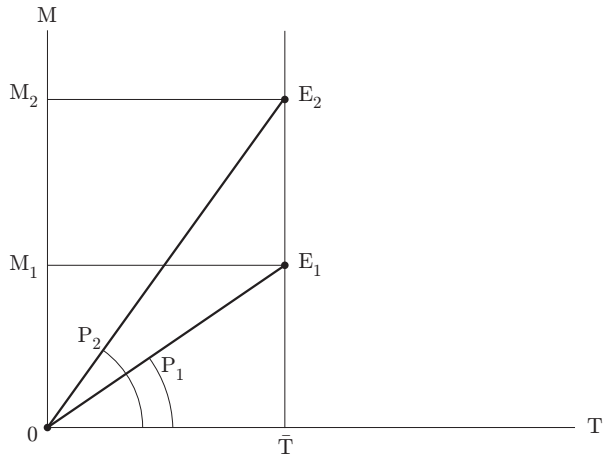


図２　貨幣数量（M）と物価水準（P=M/T）

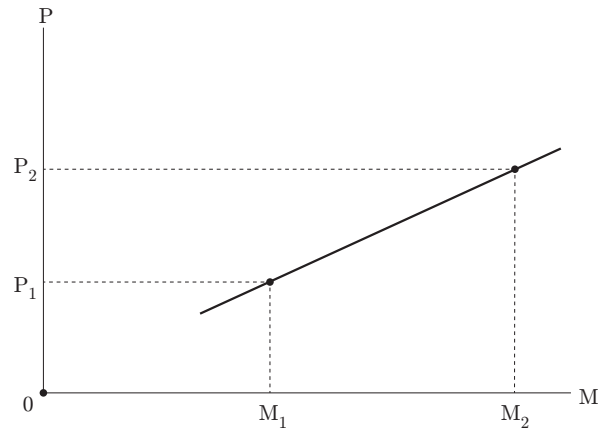
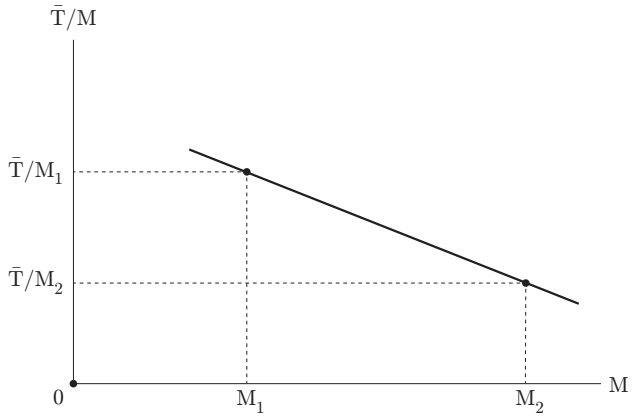


図３　貨幣数量（M）と貨幣の購買力（T/M）



が大となる場合は，金貨で計った物価 P は上昇する。増鋳による s の低下率が大きく，sM_s の値が小となる場合は，P は低下する。そして，いずれの場合も，s の変化率と M ないし P の変化率の関係を考慮すれば，銀貨で計った物価 P/s は上昇することになる。

白石の貨幣数量説の基本的な理解は，以上のようなものであると説明し得る。彼は，明確に，「上銀にて候とも，其数多く候はんには，必ず其価軽くなり候て，万物の値は重くなり候事，今日のごとくなるべく候」（『全集』版，p.228.）と述べるのである。彼が貨幣の流通速度にふれていないことは，18 世紀初頭の議論として，西ヨーロッパの経済学を視野に入れても，当然であると言えるであろう。

3. また，白石が，貨幣の数量の問題とともに扱っている貨幣の品位の問題は，貨幣の金銀という姿をとった富の蓄蔵手段としての機能に対する需要の問題である。

白石は，「建議　七」でこう述べる。

「金銀の品相みだれ候に就ては，万物の価も平かなるべからざる事，これ又，あやしむにたらず候。」（『全集』版，pp.246–247.）

この問題は，上で見た，貨幣の数量の問題に「翻訳」して理解することが出来る。貨幣の品位が変化すれば，貨幣の富の蓄蔵手段としての機能に対する需要は変化する。したがって，流通界に存在する貨幣の量も変化するのである。

この点について，白石が「建議」でしているように，同一種類の貨幣に品位の差が生じるという問題と，金・銀貨の関係に変化が生じるという問題に分けて見てみよう。

白石は，「建議　四」において，悪鋳がおこなわれた場合，品位の高い旧貨（良貨）は蓄蔵され，品位の低い新貨（悪貨）は流通界に残されることに注目する。幕府に回収されるか，蓄蔵に回されるかによって，流通界から引き上げられる旧貨の量と，流通界に投げ入れられる新価の量との大小が，流通手段の新たな量を規定していくことになる。

一方，白石が下線部で述べている，金・銀貨の併存を積極的に考慮したもとで悪鋳がおこなわれた場合について考えよう。それが銀貨であれば，蓄蔵貨幣のために新規に用いられる銀貨の一部は，金貨によって取って代わられるであろう。そうすれば，流通手段としての金・銀貨の量は，そうした変化が無い場合と比べて，金貨は減少して，銀貨は増大する。

以上 2 つの場合とも，より具体的には，蓄蔵貨幣には，さまざまな個別的事情による取り崩しがある。新規の形成と取り崩しのなかで，蓄蔵貨幣の純増・純減，したがって，流通界にある貨幣の純減・純増が規定され，その数量が，金銀の比価と物価の決定に関わっていくのである。

誰かが 1 万両という大金を蔵に貯め込んでいても，その 1 万両は，購買力として物価に直接の影響を及ぼさない。その 1 万両が問題となるのは，それが流通界から引き上げられている，という事実によるのである。（「補遺 II」参照）

4. 幕府の貨幣政策の変更は，数量の問題であれ，品位の問題であれ，まず，貨幣市場（両替市場）に影響した。そして，そこで生まれた金銀の比価の変化，「金安銀高」ないし「金

高銀安」が，財の市場に波及していった。安くなった方の貨幣で財を売るときに，以前と同じ価格で売れば，高くなった方の貨幣に換算したときに損失が生じる。そこで，商人達は，そうした損失が出ないように，安くなった方の貨幣での価格を上昇させる。そうした行動の積み重ねが，安くなった方の貨幣での物価の上昇をもたらすのである。

以上の理解は，「建議　七」に見られる。それは，これまでに説明した変化が実現されていく具体的なメカニズムを，商人達の行動に則して説いているのだと言えるであろう。

白石が直面した貨幣の世界は，2 種類の重量・品位を異にする金貨と，5 種類の品位を異にする銀貨が並んで流通するというものであった。したがって，彼にとっての貨幣問題は，複雑極まるものであったと言ってよい。以上では，彼が，そうした複雑な問題を解釈する上での基礎となったと思われる理解について纏めてみた。

5. 興味深いことは，白石が，以上のような，貨幣政策のいわば「ハード」な側面に関心を持っていただけでなく，その「ソフト」な側面にも関心を持っていたことである。

それは，貨幣政策における，人々の貨幣の発行主体への信認の確保の重要性という点である。貨幣の発行主体とは，今日では中央銀行であるが，当時においては幕府そのものであった。彼は，とりわけ「建議　五」の冒頭において，「天下の人民」（『全集』版，p.209.）の幕府の貨幣政策への信認を確保することが，改貨を成功させるために重要であることを強調するのである。

この点に関する彼の叙述は，一見すると，幕府の貨幣問題の関係者に対して道徳的な訓戒を与えているように読める。しかし，それは，金・銀貨の引き続く増鋳・悪鋳によって，人々が幕府の貨幣政策に対して疑心暗鬼に陥っているなかで，改貨を成功させるための周到な政治的措置であったのである。

6. さて，白石は，「建議　七」の末尾で，「異朝の書には，天下財用の事ども詳に論じ候物ども其数多く候を，わかき時に其かたはしばかりはうかゞひ見候事も候て，今日の事に存じ合はせ候所々候を以て，心のおよび候事共を書しるし候。」（『全集』版，p.253.）と述べる。

その場合，白石の経済理論のどこまでが，「異朝の書」――中国の書物――によるものであり，どこからが，白石自身が「今日の事」に合わせて独自に思考したものであるかは分からない。

しかし，白石自身，貨幣数量説が，「異朝歴代の間，論じ候事共」（『全集』版，p.191.）であることを述べている。また，「建議　四」からは，貨幣数量説が，知識人の間にかなり普及していた様子が見て取れる。そうしたことから，図 1～図 3 で見た，「建議」の基礎理論である貨幣数量説そのものは，「異朝の書」によるものであると考えられる。

いずれにせよ，当時の日本の正統思想が儒学であり，白石自身が儒学者であった以上，その経済学もまた，東アジアの儒学文化圏内のものであったことは自然である。

なお，白石は，「建議」の各所で，中国経済を「宝鈔」（紙幣）が主に流通する経済であると捉えている。しかし，明代の 16 世紀以降に

は，日本銀・メキシコ銀の流入によって，銀の流通が盛んになっていった。とすると，彼が主に参照した書物は，それ以前について述べたものであったと推測することも出来る。

もちろん，白石の議論に中国文献の典拠があっても，短期間のうちに金·銀貨の不均等な増鋳·悪鋳が繰り返されるという事態は，当時の日本に固有のものであった。そもそも，近世中国には，金貨は存在しなかったのである。したがって，「建議」の改貨論が，全体としては，彼のオリジナリティーを示すものであることは間違いないと思われる。

先に，白石の経済学が，重商主義時代の経済学であることを述べた。一方で，彼の経済学は，儒学文化圏の経済学でもある。西洋（欧米）と東アジア（中国）という日本の知，ひいては日本の歴史そのものを規定していく対照性は，彼の時代には，まだ，儒学文化圏の一員として西洋を見つめるという姿をとっていた。しかし，彼自身が途を切り開いた洋学（村岡典嗣（1940））は，その対照性のなかでの日本の知のあり方を変えていくことになるのである。

（4） 関連事項表

最後に，「建議」の白石の生涯における位置を見るために，関連事項を挙げておく。各種の年譜を参照したが，三田（1907）が，もっとも詳細である。白石の年齢は，数え年である。

明暦 3（1657）年（1 歳）	江戸に生まれる。名は君美（きんみ）。
元禄 6（1693）年（37 歳）	木下順庵の推挙により，甲府公徳川綱豊（家宣）に出仕。
宝永元（1704）年（48 歳）	甲府公将軍家の儲副（世継）に。
宝永 2（1705）年（49 歳）	若年寄支配に。
宝永 6（1709）年（53 歳）	5 代将軍綱吉死す。家宣 6 代将軍に。ローマ人シドッチを尋問。
宝永 7（1710）年（54 歳）	天皇即位の儀拝観のため，京都に上る。
正徳元（1711）年（55 歳）	従五位下筑後守に。朝鮮使節を接待。
正徳 2（1712）年（56 歳）	江戸参府のオランダ人と面会。荻原重秀失脚。家宣死す。家継 7 代将軍に。
正徳 3（1713）年（57 歳）	「改貨議」。
正徳 4（1714）年（58 歳）	正徳の改鋳。「改貨後議」。
正徳 5（1715）年（59 歳）	長崎互市の法改正。『西洋紀聞』。
享保元（1716）年（60 歳）	家継死す。吉宗 8 代将軍に。吉宗襲職後，失脚。『折たく柴の記』。
享保 10（1725）年（69 歳）	江戸に死す。

白石の生涯においてもっとも決定的であったのは，彼が，儒学の師・木下順庵の推挙によって，甲府公の徳川綱豊（家宣）に出仕したことである。綱豊は，5 代将軍綱吉の甥に当たり，江戸桜田に邸を持っていた。その綱豊が将軍職を継いだことは，白石を幕政の中枢においた。そうした「偶然」が無ければ，「建議」も『西洋紀聞』も『折たく柴の記』も無

かったであろう。

失脚後の白石の生活は寂しいものであった。彼の死後の評価は，王安石のそれに似ていると言えるかもしれない。彼は家宣との主従関係によって幕政の中枢に入り，王安石は科挙によって帝政の中枢に入った。そのことは，封建の日本と専制の中国との違いを示す。しかし，その 2 人とも，死後において文業への評価は高く，政治的業績，とりわけ経済政策への評価は低かった。

家宣・家継政権下の代表的知識人が白石であったとすれば，つづく吉宗政権下のそれとして荻生徂徠が登場した。

この 2 人の経済論を読み比べれば，「ポスト元禄」の時代における思考の多様性にふれることが出来るであろう。経済学的には，同じく貨幣数量説的な議論を基礎としながらも，人を静かに覚醒させる，宋詩のような白石の世界。人を激しく酔わせる，唐詩のような徂徠の世界。その背後には，前者の論理的な叙述，後者の感覚的な叙述が潜んでいた。

白石と徂徠の 2 人の議論はともに，「危機」の認識に裏付けられていた。その場合，白石の「危機」認識には，その治世後半の 5 代将軍綱吉のように，将軍が奢侈に耽ることへの批判が陰伏していた。しかし，それは，未だ貨幣問題に集中して表出されていた。一方，徂徠の場合には，「危機」の認識は，社会の「旅宿の境界」（荻生徂徠（2011）各所）からの脱出の必要という，体制問題にまで拡大されていた。そこに，白石と徂徠の思想家としての個性の違いを見て取ることも出来るであろう。また，政権の中枢にあった白石と，政権の外部のブレーンであるにとどまった徂徠との立場の違いを見て取ることも出来る。

補遺 I

「建議」「四」～「八」という番号が，いつどのような根拠で付されたのかは分からない。「改貨議」の一部である「八」が，「四」「五」から飛んでいることは，不思議と言えば不思議である。

筆者が依拠した『全集』版（1907）の原本は，岩崎文庫本であると記されている。しかし，現在の岩崎文庫（東洋文庫に併設）には，「白石建議」は所蔵されていない。また，内閣文庫には「白石建議」が所蔵されているが，それには「四」～「八」に当たる論考は収録されていない。その内閣文庫本には，ただ「白石建議」とあるだけで「第一巻」といった，複数巻にわたる書物であることを示す記載は無い。

したがって，現時点の筆者には，上記の疑問について確かめるすべは無い。

内閣文庫本は，徳川時代の写本であるが，それに収録された諸篇の筆跡は複数人のものである。なぜ，それに「四」～「八」に当たる論考は収録されていないのかということを含め，「白石建議」という書物は如何なるものか，ということを調べていくことは，今後の課題としたい。

なお，1 点を付け加えておく。

「建議　五」「建議　八」の末尾には，白石が「改貨議」を幕府に提出した年月日が記されている。この内，「日」は空白である。このことは，岩崎文庫本が，白石が幕府に提出した「正本」の他に作成して手元においた，「副

表 1　銀貨の価格と品位（正徳の改鋳前）

価格の単位は貫。品位は全重量中の灰吹き銀重量。

種類	価格	品位
慶長銀	1.5	0.8
元禄銀	1.3	0.64
宝永銀	1.15	0.5
中銀	–	0.4
三宝字銀	1.017	0.32
四宝字銀	1	0.2

出所：「白石建議　四」同「五」

本」から派生した写本であることを意味していると思われる。

白石の同門, 室鳩巣は次のように述べている。

「新井氏此頃改貨議と申物を仕立候て，上へ被ニ申上一候。私へ草稿を見候へとて送り申候。扨々詳細成物驚申候。上下二巻附録一巻有レ之候。勿論かながきに候へ共, 文章の明白なる義, 事情の熟達なる義, しかも忠厚の意を不レ失候て, 唐陸宣公奏議の外に見不レ申候。誠に以て経済之才と存候。中々行はれ申間敷候得共, 此より申入候て, 其上の用捨は, あなた次第の由被レ申候。尤に存じ候。御奉公も是迄と存じ候由にて候。」（徳富猪一郎（1936）p.311. 出典記載無し。）

この鳩巣の証言から，副本の存在とそれが執筆直後から他者によって読まれていたことを知ることが出来る。また,「改貨議」を上申した白石の決意を知ることも出来る。鳩巣の,「改貨議」を稀に見る卓説であるとした同時代的な評価は，非常に興味深い。白石を知る者は鳩巣であった。

補遺 II

白石自身が挙げた数値によって，当時の各種銀貨の価格決定について一瞥しておこう。

白石は,「建議　四」において，銀座が，四宝字銀によって民間人から他種の銀貨 1 貫目を買い入れるときの価格――両替商の買い入れ価格もそれに准じる――について述べている。また, 白石は,「建議　五」においては, そうした各種の銀貨の銀品位について述べている。それらは，上掲のようである。なお，白石の証言のみからは，中銀の価格については知られない。しかし,「建議　八」から分かるように，その存在量は，他種の銀貨と比べて際立って小さい。

以上から，各種銀貨の貨幣価値の相互関係は，銀品位の高さという要因とともに，銀品位に関わらず，幕府が法定した貨幣であるという要因そのものにも由っていたと予想出来る。その場合，貨幣を，財の流通手段として見れば，法定貨幣性が重要であることになる。富の蓄蔵手段として見れば，高品位性が重要であることになる。

そこで, その様相を知るために, 中銀を除いた各種銀貨の価格 P_i とその品位 G_i の関係を,

$$P_i = \alpha + \beta G_i + u_i \qquad (5)$$

$$\alpha > 0, 0 < \beta < 1$$

と考えて推定すると，以下のようになる。

$$\hat{P}_i = 0.776 + 0.849 G_i \qquad (6)$$

$$(12.83)\ (7.54)$$

$$R^2 = 0.950, s = 0.054$$

(・) 内は t 値。$t_{5-2,0.025}$ は，3.182。
有意水準 5 %で推定結果 (6) を採用出来る。

四宝字銀などは，白石の皮肉（「建議　四」）を緩めても，銀の混ざった銅貨であったと言うべきであろう。それでも，それは，幕府が法定した銀貨である以上は，銀貨だったことになる。

そうしたもとで，白石は，金・銀貨の品位を高めることによって，貨幣価値とその金銀としての価値との乖離を縮小させようと試みた。そのことは，貨幣に金銀という「重石」を付け，貨幣数量の無闇な増大を抑止することによって，貨幣価値と物価を安定させることになるからである。

参　考　文　献

新井白石（1907）「白石建議」（市島兼吉校訂）以下に所収。『新井白石全集』第六巻。

————（1968）『西洋紀聞』（宮崎道生校注）東洋文庫・平凡社。

————（1999）『折たく柴の記』（松村明校注）岩波文庫。

荻生徂徠（2011）『政談　服部本』（平石直昭校注）東洋文庫・平凡社。

本多利明（1970）「交易論」（塚谷晃弘校注）以下に所収。塚谷晃弘・蔵並省自編『本多利明　海保青陵』『日本思想大系』44，岩波書店。

勝田勝年（1973）『新井白石の学問と思想』雄山閣。

栗田元次（1952）『新井白石の文治政治』岩崎書店。

高橋誠一郎（1993）『重商主義経済学説研究』創文社。

徳富猪一郎（1936）『近世日本国民史　元禄享保中間時代』民友社。

野村兼太郎（1948）「新井白石」以下に所収。『近世日本の経世家』泉文堂。

丸山眞男（1983）『日本政治思想史研究』東京大学出版会。

三田葆光（1907）「白石先生年譜」以下に所収。『新井白石全集』第六巻。

村岡典嗣（1940）「新井白石の一書簡とその解説」以下に所収。『増補　日本思想史研究』岩波書店。

寺出道雄（2013）「新井白石の『政治算術』」以下に所収。『三田学会雑誌』106 巻 3 号。

————（2014a）「「白石建議　四」付注」以下に所収。『三田学会雑誌』107 巻 1 号。

————（2014b）「「白石建議　五」付注」以下に所収。『三田学会雑誌』107 巻 1 号。

————（2014c）「「白石建議　七」付注」以下に所収。『三田学会雑誌』107 巻 1 号。

————（2014d）「新井白石の改貨構想」以下に所収。『三田学会雑誌』107 巻 2 号。